

悲壯上陸作戦

福岡市博多区 宮田 正雄

昭和17年9月2日。駆逐艦での敵前上陸に失敗した我が大隊は30人、または50人乗りの小さな鉄艇約50隻に分乗し、昼間は隠れ夜間のみの隠密行動で、島づたいにガダルカナル島（以後、ガ島と略す）上陸を目指し出発した。1日、2日と木の茂みに舟を突っ込み、小枝で偽装し上陸。日暮れてまた出発した。あいにく天候が悪く月のない暗闇のため、各艇との連絡も取れず、中隊本部とははぐれてしまった。3日目も昨夜と同じで一寸先も見えない不気味な大海の真っ只中。それに波が高く舟艇は木の葉が海面を漂うように大揺れに揺れた。そのため船酔いが続出した。

4日目、ある小島（セントジョージ島）に着いたときは、すっかり夜が明けてしまった。船舶工兵の艇長等が入江の端に舟をまわし、急いで木の葉で偽装をしていた。この入江は右側が海岸まで岩が露出し急勾配に、左方向は砂浜から続いて樹木が密生していた。その岩間に湧き水があったので炊飯にとりかかり、集めた枯れ木に火をつけた。

“ドカーン”と物凄い轟音がそばの浅瀬でおきた。知らぬうちに敵機に察知され、丘の方向から爆弾を投下してきた。2発、3発と続けて投下してきた。強烈な爆風に吹き上げられた海水や岩の破片が雨あられと飛び散った。不意の敵の攻撃で咄嗟にその場に伏せた。狭い入江の中で身を隠すものは何もない。ただ地面にへばりついたままだった。

爆弾投下後は20mm砲での掃射。機銃弾は岩に当たり、岩片をもぎとり唸りをともない四散した。辺り一面に硝煙はたちこもり、その凄さに「やられる」という考えが明滅した。敵機は入れ替わりに次々に攻撃してきた。そのしつこさと至近弾に生きた気持ちはなかった。

5m先の小さな岩陰に這い寄り上半身を隠したが、実際は遮蔽にもならないところだった。『溺れる者は藁をもつかむ』の心理だろう。

攻撃も日暮れ近くになってやっと終わった。海岸には破壊された舟艇数隻が無残な姿で目に映った。また、丘陵にいた将兵多数が戦死した。ここにきてガ島が近いと感じた。

9月6日。敵機の機銃弾で使用不能になった船艇をエンジン部分等を取り替えたり、船底にあいた穴に木栓を打ち込んだりして、不眠不休で船舶工兵隊が修理に取りくんでいた。こうした努力にもかかわらず、最終的には67名を島に残す悲しい結果になった。この現場に居合わせた将校達で乗舟人員を決めていた。出発時間は大分遅れていた。一人でも多く乗せるためガ島までの燃料以外のドラム缶は捨て、70人の過剰人員を乗せてようやく出発することになった。島に残る者と「早く迎えに来てくれよ」「わかつとる心配するな」と、固い握手をして別れたが、不幸にも再会ができず最後の別れになってしまった。小雨だった天候が俄に大粒のスコールに変わった。この夜も波は高く舟艇を呑むばかりに荒れ狂った。雨は滝のように鉄帽を強く叩き舟底に溜まる。波しぶきは容赦なく飛び込み、そうでなくとも木栓数カ所から海水が

入っていたので、すぐに一杯になり汲み出しも忙しくなった。大人数で動きもままならぬところを鉄帽で汲み出すのに終始した。一晩中大きく揺れて、南へ南へと進んだ。雨と海水を被り寒さと夜通しの汲み出しと荒波に揉まれて疲労困憊もその極にきていた。

海上での夜明けは早かった。午前3時頃には上空の雲の切れ目が薄明るくなった。昨夜からの嵐も止んだ。刻一刻と明るくなってきた。朝靄のため島影も外の船艇も見えない状況下。敵飛行機の脅威が頭をよぎる。

夜が明けて10分も過ぎただろうか、あの雲の切れ目が先ほどより広く輝きを見せてきた。そこに黒点が3つ4つと見えた。

全員目がそれに集中した。「あれは鳥パイ」と誰かが言った。私もそう見えた。なおも見詰めていた。まさかと思ったとき「敵機一」。大声で2、3人が同時に叫んだ。

「ギック」とする。まだ霧のため島は見えない。絶体絶命の窮地に至った。「来る時が来たぞ」と自分自身に呼びかけ勇気をだす。敵機は雲の中に姿を隠した。全員小銃、軽機関銃を空に向けた。とうとう不安が現実となった。隠れた敵機はいまに襲いかかって来るだろうと、上空を凝視した。その間のもどかしさは何とも言えぬ嫌な思いだった。

突然後方から“シュー、ドカーン”と、舟艇前方約20m先に爆弾が炸裂、大きく水柱を噴き上げた。と同時に敵機が超低空で頭上を飛び去った。“グラマン”飛行機だった。一度雲に入り、行き過ぎたはずの敵機が反転し不意を突いての反撃だった。敵操縦士の白い顔がはっきり見えた。あとは無我夢中で小銃、軽機関銃を乱射、全員必死で応戦した。

敵機が低空で攻撃してくると命中率が高くなるので、そうさせないためにがむしゃらに撃ちまくった。敵機も右、左、後方からとあらゆる角度から機銃掃射をして執拗に反撃をしてきた。爆弾を1発持った敵機は2機で襲いかかり、攻撃が終わる頃に、新たに2機と交替、爆弾投下、20mm砲機銃掃射と、息をもつかせぬ攻撃を繰り返し、なおも苛立ってきた敵機は右、左から交差する形で同時に射撃しながら突っ込んできた。あの手この手と戦法を目まぐるしく替えてきた。

そのうちにとうとう1回目の敵弾が舟艇内に飛び込んできた。“シューバチバチ”目前をかすめ戦友の鉄帽を貫いた。その頭部は砕け、のけぞる。そのそばで胸、腹を撃ち抜かれる。5、6人が鮮血にまみれて倒れた。そのひるむ間に敵機はすかさず第2弾を、またも目の前を火線が走った。「やられた」。悲痛な声が聞こえる。足や手がちぎれ、どす黒い血が呼吸をする度に噴きだす。辺り一面に飛び散る血潮と負傷者の断末魔の呻きとが重なって、恐怖と死の間にたち、阿鼻叫喚の修羅場と化した。船舶工兵も負傷のため舟艇の進航方向が乱れ出した。その苦戦が続いていた“ギシギシドスーン”船艇が珊瑚礁に乗り上げた。

ついに、ガ島に着いた。上官の「飛び込め」の声に全員海に飛び込んだ。慌てふためき珊瑚礁の凸凹に足を取られ再三転びつつ走った。

機銃弾はたえず波しぶきをあげ身辺をかすめた。無我夢中で岸に向かう。敵機はこれを狙い超低空で容赦なく反復掃射を続けた。

その飛弾を受けてあちこちに死傷者が続出する苛酷な戦況になった。

後日、右足負傷す。

撤退時、戦友約4000名の内300余名が生還したが全員入院。100余名が病のため死亡。

残虐悲壮の戦争は絶対避けるよう。

英霊の冥福を祈るのみ。合掌